【 2 】

氏　　名	今　井　　晋（いま　い　すすむ）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	論文博第114号
学位授与の日付	昭和52年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**ルターにおける実存と神秘主義**
論文調査委員	（主査）教授 武藤一雄　教授 辻村公一　教授 山田　晶

論文内容の要旨

本論文は，四百字詰原稿用紙347枚に綴られている。

本論文は，第一章ルターにおける実存と神秘主義，第二章ルターにおける解釈と神秘主義，第三章ルターにおける「時と永遠」，第四章ルターにおける「自然と恩恵」—ルターの思想史的位置に関する一考察—，第五章ルター解釈をめぐる若干の問題—アルトハウスの立場について—，の5章から成っている。

第一章においては，本論文全体の序論的であると同時に，総括的性格をもつ考察がなされている。論者は，先ず，キリスト教における「信仰」と「神秘主義」との対立と関連の問題を取り上げ，特に，このことに関して，1920年代の西欧の神学や宗教哲学の分野で熾烈な討論が行なわれた経緯を述べる。そのような討論を顧みつつ，論者は，「信仰と神秘主義」の問題の解決を，両者の無媒介な融合または混合に求める弁証法神学以前の立場や，両者の相容れない対立を説き，啓示信仰を守るために神秘主義一般を反信仰的として斥け，キリスト教神秘主義の可能性そのものをも否認する—弁証法神学に代表されるような—立場に対比して，神秘主義を，「キリスト教信仰に固有の神秘主義」と「然らざる異流の神秘主義」とに分かち，特に前者の必然性と真理性とを強調する立場がキリスト教の本質に属することとして認識されるにいたっていると考える。論者自身も，そのような認識に立って，キリスト教神秘主義の独自の性格・構造を究明しようとするものであるが，本論文は，ルター研究を如上の問題に即して遂行しようとするものである。

ルターの神秘主義に関しても，それを積極的に顕揚しようとする考えや，反対に，きわめて消極的にみる考えが対立するが，論者の考えは，いうまでもなく，ルターという宗教的実存が最も深淵的な神秘家であり，その神秘主義が，彼に発するプロテスタンティズムの思想的生命をなすという積極的認識に立っている。この認識に立って，論者は，unio mystica と extasis の問題をとりあげ，それによってルターの神秘主義が，いわゆる神秘主義的伝統を超克するものであることを究明しようとする。

第二章は，第一節　ルターにおける解釈学の成立，第二節「ルターの解釈学」の解釈の問題，第三節「ルター解釈学」の諸問題の3節から成っている。

第一節は，ルターの「第一回詩篇講解」(1513—16) を中心にして検討されている。この詩篇講解は，詩篇のテキストをキリスト証言として解釈しようとするものであるが，ルターの採用した二つの解釈学的図式，すなわち，「文字と霊の対立の図式」および「聖書の四重の意味」(Quadriga) は，ルター独自の仕方で活用され，いわば，キリスト論的解釈を前提とする実存的解釈という性格をもつとされる。

第二節は，第一節の論旨を補完するものであり，ルターにおけるいわゆる「転義的解釈」を，ただちに「実存論的解釈」と同一視することに対して，なお慎重な配慮がなさるべき所以が説かれる。

第三節は，ルターの解釈学の諸問題を，彼の神秘主義との関連において取扱っている。ここでは，affectus 概念が重視され，聖書理解の途として，affektuale Konformität des Menschen mit der Schrift (G. Metzger) が要請されるといわれる。しかし，このような affektuale Konformität の可能根拠として，「ことばの神秘主義」が，ルターの神秘主義の根本要素であることが闡明される。

第三章　ルターにおける「時と永遠」は，ルターの時間論が，アリストテレス—オッカムの線とアウグスティヌスの線との交錯において成り立っていることを明らかにし，それによって，彼の時間論が，総じて，外的—客観的時間規定と内的—主観的時間規定の相互制約において成立している，と説かれる。しかし，「永遠」は，計測可能な個々の瞬間の継起としての時間を止揚する。永遠においてはすべてが同時に現前するというアウグスティヌスの「全体同時」(tota simul) の思想に呼応して，ルターにおいても，神の前には，あらゆる時，あらゆる事が同時である。神の現在は，人間の時間的生を一瞬時に包摂する永遠の現在である。したがって，永遠は無時間性を意味し，神は無時間的—永遠である。神は，時の創造者であり，時の外に立っている。ルターによれば，永遠から頽落した人間は虚無のうちに生きる。神は無時間的—永遠であるから，時間のカテゴリーで把捉することはできない。われわれが，神の無時間的現在を経験するためには，過去，現在，未来というすべての時態を超出しなければならない。これはまさに精神の脱自 (excessus mentis) においてのみ生起することである。かくして，キリスト者は，神秘主義的脱自性において，神の前に時を視る。その時は，空無化された時であり，時間的未来にあらざるを終末論的未来が一切となる。なお，ルター自身の試みた「コーヘレト」の解釈も，彼の時間論の新たな展開に寄与するところがあった。それは，カイロスとしての時の把握と Sorge としての時間性の理解に示されている。これに続いて，時と永遠の視点から，死の理解，律法と福音，義認，終末等にも論及されている。

第四章は，ルターにおける自然と恩恵の問題を，ルターの思想史的位置に関する考察を交えて論じている。特にルターとトマスとの対比が問題とされる。トマスの場合は，自然と超自然的恩恵の階層的統一が試みられ，そこに両者の連続観が見られる。ルターのこの問題についての理解がトマスとは根本的に異なることが，K. Barth と E. Brunner のいわゆる自然神学についての論争を顧みることによって明らかにされる。バルトは，ブルンナーにおける啓示と理性の非連続の不徹底を厳しく批判し，両者の相関，対応を拒否する超越と断絶を強調した。論者によれば，なおトマス的連続観を残すブルンナーも，これを批判するバルトも一面的であることを免れない。しかるに，R. Bultmann は，人間の神に対す

る「矛盾」は，神の人間に対する「矛盾」に対する「結合点」であるとし，ブルンナーにおける「結合」とバルトにおける「矛盾」とを止揚して，絶対否定即絶対肯定という真の弁証法的統一にもたらし得たとされる。そしてこのような方向は，ルターの「十字架の神学」と「終末論的神秘主義」として理解される「隠された神」のうちに，Ansatz として洞察されているところであったとされる。

第五章は，ルター解釈をめぐる若干の問題と題されるが，主として，ルター研究者として，ひときわすぐれている P. Althaus の立場について，論者の所見を交えつつ解説したものである。アルトハウスは，ルターと聖書にもとづきつつ，在来の罪中心的神学（hamartiozentrische Theologie）に対して，より根源的に，神関係，堕罪以前の原初状態，すなわち創造秩序において信仰，恩恵，義認を理解する。神中心的神学（theozentrische Theologie）を主張するにいたった。論者は，アルトハウスのルター理解の深さに共鳴しつつ，アルトハウスの主張する「神関係」と「罪関係」との関係を問題にする。それは，本質的順序にしたがえば，後者は前者に，われわれの体験の順序にしたがえば，前者は後者に止揚されるという関係であるという。かくして，罪人の義認は，creatio ex nihilo という創造論の最も崇高な特例であるとするアルトハウスの主張が理解されるのみならず，体験の順序にしたがっていえば，創造論は救済論に止揚され，救済論の光のもとに理解されることになるとされる。

論文審査の結果の要旨

本論文は，宗教改革者ルターの信仰と神秘主義とのかかわりについて詳細に論じたものである。論者は，第一章『ルターにおける実存と神秘主義』において，本論文全体の序論的であると同時に，総括的な性格をもつ考察を行なっているが，そこでは，「信仰」と「神秘主義」との対立と関連について，特に1920年代の西欧の神学や宗教哲学の分野で行なわれた幾多の論議を顧みつつ，両者を無媒介に融合または混合させる立場（弁証法神学以前の立場），および，その反対に，両者の排他的対立性を説き，神秘主義を斥けて啓示信仰の絶対性を守ろうとする立場（弁証法神学に代表されるような立場）を，共に斥け，キリスト教に固有な神秘主義の必然的意味を明らかにしようとする。その論旨は，おおむね明快であるとともに，強い説得性をもっている。論者は，このような見地に立って，ルターにおける実存と神秘主義の問題を論じ，ルターという宗教的実存が最も深淵的な神秘家であり，その神秘主義が，彼に発するプロテスタンティズムの思想的生命をなすという認識に立って，本論文を叙述している。わが国におけるルター研究は，かなり高度の水準に達し，その研究論文ないし研究書の数も少なくないが，本論文のように，ルターにおける神秘主義の問題を詳しく究明したものは，皆無に近く，しかも，この問題の重要性に否定すべからざるものがあるから，本論文のもつ意義は，きわめて大であると思われる。

第二章『ルターにおける解釈学と神秘主義』は，論者の最も力を傾注したところであると思われるが，テキストとしては，主として，ルターの「第一回詩篇講解」が用いられ，彼の聖書解釈が，究極的には「ことばの神秘主義」(Mystik des Wortes) に帰することが明らかにされている。それは，いわゆる直接性の神秘主義ではなく，あくまでキリストの受肉に類比を求めうるような「ことば」と結びついた具体的な媒介性の神秘主義として「ことばの神秘主義」であるとされる。なお本章は，その論述の過程において，ルターにおけるいわゆる転義的解釈（Tropologie）が，現代神学の言葉でいえば，実存論的解釈（exis-

tentiale Interpretation）と共通のモティーフを含みながら，しかもその根底において，どこまでもキリスト論的解釈にほかならなかつたことを明らかにするが，このような指摘はきわめて重要であると思われる。のみならず本章のルターにおける解釈学の究明は，およそ聖書解釈学の問題に対して，貴重な示唆を与えるものであると評価されるであろう。

第三章『ルターにおける「時と永遠」』も，ルターの時間論および終末論についての秀れた洞察を含んでいる。論者は，ルターの時間論を，主として，彼の「創世記講解」にもとづいて考察しているが，その際，ルターの時間論におけるアリストテレスーオッカムの線，およびアウグスティヌスの線の交錯という点に留意するとともに，彼の「時と永遠」についての思想が，終末の日が「永遠の大いなる同時性」において始まるといういわば終末論的神秘主義に究極することを明らかにしている。この点も，たしかに，論者のいうように，使徒パウロに見出される未来待望に関する二重の思想（終りの日の一般的よみがえりの思想と，個々人の死に直接する永生への転入という思想）の統合として理解されうるものであり，論者のルター理解の非凡さを示す一例といえるであろう。

第四章『ルターにおける自然と恩恵の問題』は，この問題を，一面においては，トマスとの対比について論ずるとともに，他面，この問題に関する E. ブルンナー，K.バルト，R. ブルトマンの論旨の見事な要約を行ないつつ，結論的にいつて，ブルトマンの人間の神に対する「矛盾」は，神の人間に対する「矛盾」に対する「結合点」であるという洞察が，実は，本来ルター神学に内包されていた思想であるとする。このような論考は，論者のルター研究が，単に歴史的文献学的研究であるにとどまらず，同時にきわめて組織神学的な思索に媒介されているものであることを証するものであって，この点が，本章のみならず，本論文の全体にわたるすぐれた特色をなすとみなされる。

第五章は，『ルター解釈をめぐる若干の問題』と題されるが，主として，ルター研究者として著名な P.アルトハウスの立場について，論者の所見を交えつつ解説したものである。この章は，アルトハウス神学の研究として別箇に取り上げてみても，すぐれたものであり，また，アルトハウスのルター理解と論者のそれとが，深く交流しつつ，相携えて，深淵的なルターの神秘主義に参徹しようとする論者の姿勢が看取される。

以上，本論文の各章にわたって，そのすぐれた特色と思われる点を簡略に述べた。論者は，大部分ラテン語で書かれた浩瀚なワイマール版ルター全集を資料として駆使しつつ，ルター独自の神秘主義の性格を明らかにしようとする。また論者は，前掲のアルトハウスの諸著をはじめとして，おびただしいドイツ語圏のルター研究書を読破し，それらを批判的に検討するとともに，その成果を充分に摂取している。本論文は，わが国におけるルター研究の水準を抜きんでるものであり，しかも既述のように，ルターにおける神秘主義の問題を究明したものとして比類なき価値を有するものと認められる。

本論文の欠点，または望蜀の感といいうるかも知れないが，今後の研究に期待したい点も，少なくない。若干の点を例示するならば，1)ルターといわゆるドイツ神秘主義との関係について，より深く，また綿密な研究が望ましいこと，2)論者も関説しているルターとアウグスティヌスやスコラ学との思想的なかかわりかたについても，より精緻で内実に即した究明が必要とされるであろうこと，3)新約聖書的神秘主義（特に使徒パウロのそれ）との関係が，ほとんど欠落していること，4)プロテスタント的神秘

主義とカトリック的・サクラメンタルな秘義（mysterium）としての神秘主義との関係如何という問題，5)さらに，そもそも，なにをもって，またいかにして，ルター的神秘主義を，論者のいわゆる真正な神秘主義として根拠づけうるかという問題，等である。

これらの問題点の究明を含めて，論者の今後の研究の進展に期待さるべきところは大なるものがあるといわなければならない。

しかし，以上のような若干の問題点を含むにもかかわらず，上来述べてきたように，本論文は，特にわが国のキリスト教学界，宗教学界に寄与するところの大きい学術論文として高く評価される。

よって，本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。